

四日市市における商業地域の形成と機能

高橋香織

本論文は、商業施設の近代化がここ数年目立っている四日市市という地方都市において、その商業の現状をマクロ的、ミクロ的な側面から分析することを目的とした。すなわち前者は、四日市市の商業の三重県における位置、後者は市内の様々な商業施設の間での機能分担、主に中心商店街の性格・現状についての考察である。方法としては市の統計や商業調査報告書、論文等を参考の上、聞き取り調査、住民におこなったアンケート調査をもとに執筆した。

四日市市は、三重県で最大の人口集積をもつ、北勢地方の中核都市である。四日市市はもともと宿場町・商業の集積地として発展してきた都市であり、以前から商業力は強かったが、戦後、臨海部での工業発展が著しく、工業都市へと変容した。しかし近年、工業は伸び悩んでおり、商業・サービス業を中心とした第三次産業が再び活発になってきている。

四日市市は、県内で最も大きい商業集積を持ち、小売販売額も県でトップである。とはいえ、人口一人当りの売場面積や販売額において、津市などを下回っており、四日市市の商業施設はその都市規模から考えると、十分なものとはいえない。また、これまで四日市市への依存の大きかった周辺都市において商業集積が進んだため、都市間競争が激化した。その背景には、モータリゼーションの訪れによる郊外への商業施設の進出（とくに大型店）が考えられる。このように、四日市市の相対的な商業力は、年々低下傾向にあった。

県の提示する四日市市の広域商圏人口は、平成2年現在でおよそ31万人である。また、四日市市

は周辺市町村から多くの通勤・通学者を集めており、その範囲は広域に及んでいる。四日市市商業にとって最大のライバルは名古屋市であるが、四日市市の通勤圏の広さ、交通条件の良さや周辺都市からの心理的距離の近さから、四日市市は、今後の展開によっては、充分人を吸収することが可能であると考えられる。そのため、まずは地位が低下している中心商店街の整備・近代化は必須である。

住民の一般的な買物行動は、若年層は行動範囲が広く、こだわりを持っており「繁華街」が好きであること、年齢が上がるほど、買物に利便性を追求する結果、郊外ショッピングセンターを好むことが分かった。また全体的に買物を楽しもうという傾向が強く見られた。

買物調査によると、よそ行き着や貴金属類などの買い回り品は百貨店での購入が、普段着や靴のような買い回り性最寄り品は郊外ショッピングセンターでの購入が多かった。家具・スポーツ用品に関しては郊外の専門店での購入が70%を越え、大きなシェアを占めている。中心商店街での買物率は総合（平均）で5.3%を示し、その中心的役割を果たしているとはいえない結果であった。名古屋市への流出は20代を中心に多くなっており、こうした若年層のニーズに耳を傾け、中心商店街を整備する必要があるだろう。

複合商業施設「アムスクエア」出店、近鉄の大改装などにより、四日市市の街の顔は、ここ1～2年で確実に変っている。今後は、四日市市の商圏人口、100万人達成を目指し、中心商店街の再開発計画「地区更新計画」のより早い実現が望まれる。